

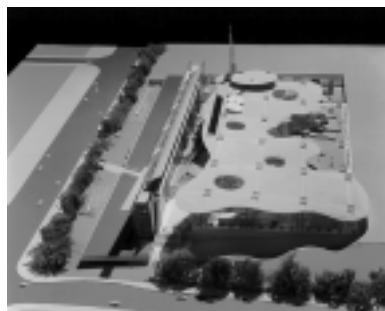


—今年1年を振り返って—

### 国立国会図書館コンペを回顧する

中村 弘道(部1期)

中村弘道・都市建築計画設計研究所



公共建築の設計者選定が、公開コンペによることが増えてきた。これは公開性のもとに設計が行われるという点で好ましいことである。その中に公開プロポーザ

ルコンペというのがある、今、盛んに行われているが、公開性といえども不公平な実績主義が色濃く反映し、私は好きにはなれない。2、3回参加したが、何を基準に選定したか判別できない。私の事務所では、住宅から大規模計画まで質の高い設計をこなす実力は備えていると自負しているのだが、何といても所員数とか売上高などの数字だけで下位に評価されてしまう。最初は何の実績もないのであるから、余程の偶然でもない限り実績はつくれない。つまり公共建築の設計に参加できるチャンスは公開コンペで勝ち取るしかないのである。ただ、これは宝くじで一等を当てるくらい難しいことである。

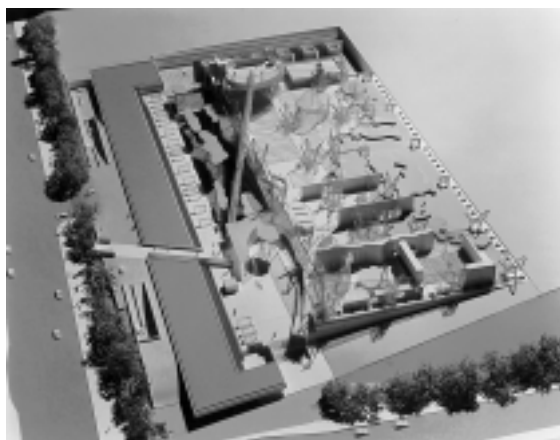
今回、応募した国立国会図書館関西館コンペでは佳作入選となった。国際コンペで海外からの応募も含め498点より選定されたものだ。ここ10年間で最大規模のコンペである。応募するに当たっては、実現される建築設計であるため、大変な集中力と労力を必要とされた。私の持っている感性や判断力を駆使し、時代を読みとりながら決定していくプロセスは、試行錯誤の連続であった。しかし、この段階のスタディのやり取りは何といても時代をつくるという点で面白いものがある。

今回のコンペについての感想を述べるなら、最優秀案は模型写真のビジュアル的な印象は良かったものの、平面などを見ると果たして6年後の完成時に注目される迫力が備わったものになるかという気がかり

が残る。審査側の読み取りに欠けた点はなかったのかと思えてしまう。コンペの最優秀案は建築の流れの中で歴史をつくり出してきたことを思うと、20年、40年の先にも名作として世界に残り得る建築となることが望ましい。この観点からすると日本には作品が大変少なく、そうした作品的価値の高い建築がこうした大コンペの最優秀案にふさわしいのではないかと感じる。

国立国会図書館は一般の図書館とは社会的機能が全く異なり「情報」としての書籍ではなく、「物」としての書籍の集積空間である。この巨大な本の倉庫を「本のスーパーマーケットだ」と言った案もあったが、私は「知」の資産のストックととらえ、システムに乗った増殖を「知」「地」として土の中に堆積させ、また「知」をいかに速く取り出せるかという運営側からの観点、快適性を追求したシステムの増殖ネットワークが歴史に対応した新しい国会図書館となり得るとみた。後世に残り得る国会図書館の姿はこれを建築化したものであると確信している。

デザイン的には、雲を形容した有機的な屋根に覆われた閲覧空間をつくり出す。雲は日差しを遮ったり太陽光を雲間より採り入れ室内をコントロールする。増築に対しても雲はたなびいたり、また覆ったりしながら増殖していく不変のシステムとなる。上位案すべての中で曲線の屋根のスキームは私のものだけである。コンピューターによる書籍の取り出しを道路側のファサードにガラス越しに見せるなど、書籍搬送システムをビジュアル化し歴史に耐え得る建築空間をつくり出した主旨は審査委員に読み取られたのだろうか。今でも屋根の平面形状をもう少し抑えたスキームで完成させるべきであったかもしれないと思うことしきりである。



## 芸工大より

片野 博(部3期)  
九州芸術工科大学環境設計学科 教授



はじめに、築理会の会報に寄稿させていただくこと大変光栄に思っています。今回は「今年一年を振り返って」とありますが、私が九州芸術工科大学(以下では芸工大とします)に参りましたのが1972年でしたので、足掛け25年になります。25年間といいますが、私が東京で育ち、大学を修了し、大学院の博士課程の途中から赴任のために初めて九州の地に赴くまでの東京での生活とほぼ同じ年月になります。光陰矢の如しとはいいますが、当地で結婚、子供をもうけ、この子供たちが大学生になっている現状を考えますと東京と九州での生活が同じ期間になった何かの節目の時期のような気がします。

少々スペースを頂き、勤務先の芸工大を紹介したいと思えます。芸工大は初めての芸術工学部として昭和43年に環境設計・工業設計・画像設計・音響設計の4学科構成で開設されました。最初は各学科定員30名の全国一小規模な国立大学でしたが、組織の発展は拡大によるのとおり、学科改組等を経て40人、50人と数が増加し、少人数教育の特徴が失われたのではないかとの話も聞きます。また一般的な傾向とは思いますが、かつての開校当時は女子が全学でも両手で数えられる位でしたが、現在では約3割くらい居ますのでキャンパスの雰囲気が変わりました。独断になりますが、服装がきれいになった分、学生の馬力がなくなったようで少々寂しい気もします。

芸工大キャンパスは、ご存じのとおり開設時にいらっしゃった香山寿夫先生(現在は東京大学教授)の設計になるもので、45度の軸線を取り入れた独自の手法をもって建物が配置されています。しかし残念なことにその後校舎増設がありまして、マスタープランとは異なった建物が出現してまとまりのない空間になってしまいました。もっとも大学の施設課からの依頼により小規模な増築に関係しましたので私にも責任があるかもしれませんが、それでも他大学を訪ねたときは芸工大キャンパスの独自性が感じられます。芸工大の敷地は旧制中学のものであり、総合大学と比べれば敷地も非常に狭いものです。しかしデザインの大学であるなら町との連携も大切ですし、もっとコンパクトでも、理科大神楽坂キャンパスのよう町の中に入り込んでいてもよいと思えます。大学はスポーツをする場所でもありませんし、町中にあった方がよい学部・学科もあります。特に建築学科ではそのようにいえましょう。

全国初の芸術工学部として発足しましたが、その後、東海大学の旭川に芸術工学部が、そして神戸芸術工科大学、東北芸術工科大学が誕生し、さらに本年に

は名古屋市立大学に芸術工学部が開設されましたので、全国唯一の看板は外さざるをえず、また最初に設置された「老舗の国立大学」の看板だけでも不十分で如何に芸術工学をリードして行くかが課題で、大綱化に対する学内組織の再編成と新設学科の設置によりこの難局を乗り越えようとしています。

私の所属は環境設計学科で、授業は構法計画を中心に担当しています。環境設計であるために、都市・地域計画やランドスケープ、環境保全等、広域分野が対象となり、いわゆる技術に関する授業が少ないのも事実で、建設現場を知るのには学生の時に不可能であっても、技術から乖離した抽象論をもって設計せざるを得ない点に少々懸念があります。最近では大学受験でも理工系離れをいわれています。たしかに数学や物理は暗記ものではありませんからかなり本質を理解していないと難しいかもしれませんが、このあたりの問題点のとらえ方は建築設計と非常に密接な関係にあるといえましょう。研究としては、地方における建設活動の特性や広義の建築生産の品質管理を対象としていますが、この分野は全国的に見ても研究者が少なく、特に九州地区では共同研究できる方がいませんので困っています。

25年間も福岡にいますと町の様変わりが強く感じられます。赴任後は新幹線の博多延長、空港の第2・国際線ターミナルの完成さらに地下鉄の開通と空港までの延長など交通機関が充実してきました。また福岡市の西部では百道地区にドーム球場・大規模ホテル、さらに高層マンションや情報機関・施設を集約したプラザ建設など真新しい建築が目につきます。最近では博多駅近くに複合商業施設の「キャナルシティ博多」もオープンしましたし、最近の建築デザインが福岡にいても掴めるようになりました。しかし、福岡の町を持っていた歴史を含めた固有性が見失われる傾向にあり、極言すればデザインの植民地化したような印象も受けます。

上京した時、中央線の車窓からお堀越しに理科大キャンパスを見ることがあり、大学での授業のことが思い出されます。親になってはじめて親の苦労がわかるといいますが、大学生の時には自分がまさか大学の教官になるとは思っていませんでしたし、今になって当時の先生方の苦労が偲ばれますし、何年たっても教えることに自信がもてません。

当地福岡にも築理会の支部がありまして、お誘いを受けながら、多忙や何となくおっくうだと顔を出すことがないままに終わっています。今後は少々反省をして地方における築理会の活動にご協力するつもりです。最後になりましたが、築理会の皆様並びに理科大建築学科の今後一層のご発展を期しながら筆をおくことにします。首尾一貫した内容にならず雑感になってしまったことお詫びします。

## 今年1年を振り返って

久米 恵祐(部19期)  
(株)A d d都市建築事務所

本年は、私の人生に於いて転換点の一つとなりました。それは、25年間を過ごした東京を離れ、神戸へと移って来た事です。勿論、転職がその理由なのですが、その為に築理会の幹事の方々にも色々とお世話になりました事をこの書面を通じて御礼申し上げます。

さて、平成8年を振り返って思う事を徒然なるままに綴らせて頂きます。前述の様子に12年間勤めました(株)四谷建工から(株)A d d都市建築事務所へ転職したのですが、ゼネコンの営業から設計事務所への職替えです。しかも、勤務地が関東より阪神大震災を被った関西へとその環境が変わりました。それから、9ヶ月余り経ちますが、習うより慣れろの例えのごとく右往左往の毎日です。幸いに、前職での様々の経験が生かされ、又、私は九州の出身で食べ物にも苦勞せず馴染めましたので何よりでした。身の上話はこれくらいで、神戸に来て感じた事柄を述べます。

私が赴任した2月末に比べ、随分と復興されてきました。JR三ノ宮駅前のそごうデパートの昼夜続行の補修工事も完了し、阪神高速も全線開通しました。道路関係の復旧工事は、平成9年3月末までには概ね完了するそうです。三ノ宮のメインストリートであるフラワーロード沿いは、工事中の物件がかなりありますが、街を行き交う人々の様相も落ち着いて来ました。

所で私は東灘区の南魚崎という所に住んでいて六甲ライナーにてJRの住吉駅から三ノ宮に通っています。ご存じの方も居られるように、私は17年程前に交通事故で右膝が曲がらなくなりました。この為に、階段の上り下りに気を使います。この点、私の通勤での乗降駅には全てエレベーターかエスカレーターが設置されていますのでかなり楽です。勿論神戸エリア全ての駅が完備されているのでは無いのですが、これは首都圏との違いを感じました。多分、震災前の神戸市の潤沢な財政の良さにより、利便性に富んだ都市造りが可能だったのだと思います。今でも、街路の花壇の手入れには素晴らしいものがあります。去年の12月に好評だった、イタリアからとりよせたルミナリエ(イルミネーションのアーチとデコレーション)が前回よりも大きい規模と長い期間で催されます。今から楽しみにしています。

但し、前述の様にいい面だけの印象を受けた訳ではありません。今、阪神間では震災による交通アクセスの悪さにより、第2のバブルではないかと思える位、工費が上がっています。こう言っただけでは誤解を受けるかもしれませんが、弱味につけこんだ様な印象を受けました。これは、職人の絶対数の問題により人件費が高昇している為で、決してゼネコン各社が暴利を貪っているからではない様です。しかし、今回の様な災害にみまわれた方々の再建の為にもう少し何とかならないものかと思いました。又、行政面でも様々な規制や指導があり早く復興しようにも認可をもらえるまで

日数が掛かり過ぎる点もマイナス要因でしょう。聞く所によると、兵庫県は、川西方式と言って許認可に対してかなりの労力が要する所が多いそうです。それには、様々な地域性・歴史性に基づく特性がある様な気がしました。相隣問題に関しても言えるようです。

ここで、話題を変えます。今、私は心ある方達のお手伝いをしております。それは、新聞・テレビを賑わしている高齢者福祉に関する事です。勿論、業務に関わっている方達の心に触れていい勉強をさせてもらっています。ご存じの様に、21世紀初頭には65歳以上の高齢者が全人口の4分の1になるとの予想の基に今話題になっている新ゴールドプランが政府によってなされたのですが、今回の様な事件になって非常に残念です。私も交通事故により身障者になって、前述の様な視点で諸施設を観るようになったのですが、建築に関わる者の一員として感じた事を述べます。当該プランにより数多くの施設が建設されました。我々の職務は、施設という入れ物を作る訳ですが、そこを利用したり使ったりする方の視点からずれる事があることに気付きました。一番大切な事は、ハードではなくソフトであると言う事です。その施設を通じて関わる、要援助者である高齢者の方々に生き甲斐をいかに見出してもらえるかと言う事です。極端な話、施設は既存の木造の一軒家でもかまわないのではと思うくらいです。色々束縛され、居心地の窮屈な思いで余生を過ごす高齢の方々の立場で物事を考えれば自ずと見えてくるものがあるような気がしました。これは、私がお手伝いしている方々と、及び、実際に運営している施設のスタッフの方々と話をしている気付かされた点です。又、テレビでの特集や書籍からも考えさせられました。先日、NHKの番組で、手足と視力を拘束された婦人が、その状態で行動してみても初めてその不自由さに気付いたというのがありました。ある照明器具メーカーでは、高齢化に伴い照度に対する知覚力が衰える為、その対策に関する講習を行っていました。一般に、高齢者に対し建物上バリアフリーを考慮する様になりました。唯、これだけでは不十分で、肌理細かい対応がますます必要と思えます。例えば車椅子で引戸を開けようとした時には、支えとなる縦型の手摺の設置が必要です。水仕舞いの要する床にはグレーチングが無いと、バリアフリーのために水の浸入を許す事になります。足腰の弱い高齢者はいつ転ぶか判りません。その時に角があったり、堅い仕上材であったりしたら大怪我になりかねません。この様に、普通の健常者の視点で考えつかぬ事が多々あります。繰り返しますが、大切な事は相手の立場に立って考える事と思えます。

最後に、こちらへ来て9ヶ月程になりますが未だに関西支部設立のはたらきかけが出来ていません。その日その日に追われている毎日です。平成9年には、是非とも第1回の集いを実現したい所存ですので、関西在住のOBの方々のご参加をお願いいたします。

## 近況報告・公共建築に携わって

上條 美枝(部20期)  
伊東豊雄建築設計事務所

早いもので伊東豊雄建築設計事務所に入って7年目が終わろうとしている。当時は、初の公共建築に試行錯誤しながら取り組んでいた事務所も、現在は公共建築ばかりで、規模・件数とも予想しなかった状況になりつつある。私もこの3年程秋田県発注の大館地区多目的ドームの担当として、途中幾つかのコンペ等に参加しつつも、大半をこの仕事に費やしている。したがって、月の三分の一は大館に、三分の一は移動中といった生活が続き、自分の生活主体はどこにあるのやら、まさにすべてが通過点といったところである。大館ドームに関しての途中経過は、2月号の建築技術、SD等に掲載される予定なので、それをご覧いただきたい。ということで、ここではなかなか言えない愚痴を少々。

すべての公共建築がというわけではないが、時々いったい誰のために造っているのか解らなくなることがある。行政サイドの造ってあげているんだという少々高慢な態度がちらちらすることもあり、ましてやそれらを本当に活用していくための運営主体がはっきりしないまま、大抵は一般的で問題のない範囲内で進めていこうとする。こういった役人ばかりではないが、基本的な姿勢が問題である。また、今回のような特殊(ゼネコンと設計事務所の設計共同、及び施工の一体化)な状況の中で、本当のコストといったものの不明解さを感じる。技術やソフトに対するコストがなかなか認められない社会の中では、それを包括させ物の値段を要求するしかないという致し方ない部分もあるが、やはりこれらをはっきりさせていかないと、技術やソフトに対する本当の評価というのは得られないのではないだろうか。今回のプロジェクトは、施工サイドに初めからかなりの無理を覚悟して取り組んで頂いたもので申し訳ないのだが、こういうこと自体も、本来の価値が見えなくなる原因ともいえるのではないであろうか。

大館ドーム自体は、各企業の最先端の技術と職人の腕、携わっている人々の思いが結集され、美しいシルエットを現しつつある。平成9年6月末竣工予定。ご期待頂きたい。

## 猿岩石にあこがれて

平岩石(部16期)

僕は今年9月、建築を見るという大義名分を掲げ、5週間の予定でイタリア、フランスへ旅に出た。(本当はイタリア人とイタリア料理とフランスに住んでいる友達に会うのが一番楽しみだったんだけど)。当然貧乏旅行になるわけで、それゆえに大変なことがたくさんあった。まして海外は2回目、飛行機に乗って旅行するのも3回目、1人旅なんてした事のない僕はキタイとファンで行く前からドキドキだった。

## プロローグ

9月21日日本を旅立った僕はトランジットでモスクワに降りました。モスクワという所はさすがにロシアの首都だけあって、空港内だというのに暗くて寒くて薄気味悪く、1人で心細い僕の心にさらに追い打ちをかけました。その上何とフライト時間を表示するボードが壊れているじゃないですか。ローマ行きと書いてある所に行ったら「ここじゃない」といわれるし、入口には警官と軍人がデンと立っているし、小心者の僕にはもうゴウモンとしかいいようがない状況でした。あんまり心細かったので、僕と似たような日本人のバックパッカーの若者と友達になりました。



そして予定より1時間以上遅れてローマ、レオナルド・ダ・ヴィンチ空港に到着。入国手続きが終わった時はすでに夜の11時、テルミニ駅のすぐそばに1泊目のホテルを予約してあったので、とりあえずテルミニ行きの列車に乗ろうと駅へ行きました。駅の構内はもう薄暗い感じで駅員のおっちゃんも見あたらず、あたりには何人かの僕と同じような目的の旅行者がいて、みんな途方に暮れていました。するとそこにひとりの駅員が現れ、「ノンチェ(ないよ)」というではないですか。どうやらテルミニ行きはもうなくて、ティブルティーナかオスティエンセまでは行けらぬ。とにかく乗るしかないで乗り、そしてここでもうひとり仲間が増えました。彼が言うにはオスティエンセからテルミニまではメトロが走ってるから大丈夫ということで、一路オスティエンセへ。ちょっとだけホッとしたのもつかの間、オスティエンセからのメトロはもうなく、あたりには夜遊びしている若者やら、シロタクの客引きやらがいっぱいで、しばらく3人で悩んだあげく、テルミニまで約3キロ強の道のりを歩くことにしました。途中ジェラートを食べてちょっと元気になったり、ライトアップされたコロッセオに感動したりもして、そしてテルミニのそばで一時的な連れとサヨナラ。ホテルに着いたのは夜中の2時近くでした。

まあそんな風にしてのっけから一人旅の洗礼をうけてしまった僕の旅ですが、この後いよいよ波瀾万丈、貧乏暇だけたっぴりの旅が始まります。今回は紙面の都合上ここまでで終わりです。次回があるかどうかは解りませんがご期待下さい。

## from Freshers

私の8ヶ月間

伊勢 比呂史(部31期)  
郵政省大臣官房施設部建築業務課

社会人になって8ヶ月が経ちましたが、本当にいろいろなことがありました。

郵政省では入省してからの最初の3ヶ月間は、事務官と技官は殆ど同じ研修を受けます。その中でも主要なもの、郵便局実習と通信政策の講義と英会話です。

郵便局実習では、緑色の郵便服を着て差立てをしたり、保険の勧誘を装ってデパートのお姉さんとお話したり、雨合羽着て配達に行ったりしてました。局長に言わせれば、私はその郵便服がとても似合うらしく、その勇姿を皆さんに見せられなかったのが残念です。大先輩の吉澤先生も昔同じ事をされたそうなので、ちょっとだけ目頭が熱くなります。(笑)

通信政策の講義は、はっきり言って建築とは全然関係ないので建築職で採用の人間にとっては…逆に楽しかったです。ちょっとだけデジタルになりました。

英会話では国営の事業で本当に使うのかと首を傾げながら、「Pardom me?」の連発でした。

そんな感じで、行政官としての知識を蓄え、建築の勉強を一つもやらないままロングバケーション(我々はそう呼んでいる)を終えて、7月1日から官房施設部に配属されたのです。

全国に郵便局が2万4千からある割には本省の郵便局専門の意匠設計チームは私を含め5人しかいません。配属1週間のヒヨコに1万8千平米の郵便局の担当をさせるような無茶をします。

それでも完成検査を無事(?)終え、他の仕事に追われていたある日、その郵便局の開局の記事が載っている地方紙のコピーが回ってきました。まあヒヨコに例えれば、歩けないけど取り合えず立てたかなという喜びに近いものがありました。いつか旅行でそこに立ち寄ったときお金をおろしてみようと思っています。

現在は山梨県にある2千8百平米の基本設計とその事務局をしています。CADで図面を引いていると屋外からマイクで行政改革がどうのこうのと仕事の邪魔をする人がよく来ます。そうすると自分が引いている郵便局の計画が頓挫するのではないかと不安です。それでも私の当面の夢は郵便局実習でお世話になった日本橋郵便局の職員のために新築工事の設計をして恩返しをすることなのです。そして、それには通信関係の知識を駆使し、英語の文献を数多く読まなくてはならないのでしょう。将来成るか成らざるか…ヒヨコはまだ立ち上がったばかりです。

## 地方便り

熟練工不足と遅れてやってきた建築不況

宇治野 美秀(部22期)  
(株)宇治野建設設計部長

理科大を卒業し、故郷の宮崎に帰ってきてから、はや10年が過ぎようとしています。こちらに帰ってきて、木造を中心とするわが社で働き始めたのが87年。ちょうどバブル景気の始まりの頃でした。東京と地元宮崎とのギャップに戸惑いながらも、住宅の設計、工事監理の仕事覚えるのに必死になっているうちに、バブルの大波が九州にも押し寄せ、あれよあれよという間に10階建以上のビルがあちこちで建ち上がるようになりました。

90年代に入ってバブルが崩壊した後も宮崎の建設業界はすぐに不景気にはならず、しばらく好景気が続きました。私自身も仕事に忙殺される日々を追われ、うちの会社の業績もよかったです。

ところが世の中は甘くなかった。建築不況の波は遅れてやってきたのです。最近、大都市部では徐々に建設業界も活気を取り戻しつつあると聞きますが、宮崎はまだダメです。ここ5年ほどは深刻な建築不況が続いています。特に落ち込みが激しいのは在来工法の木造住宅分野。阪神大震災を機に、耐震性を売り物に躍進してきた大手プレハブメーカーの影響、職人不足のありなどを受けて、受注高もずっと前年比減が続いています。

特に大工不足は深刻な問題で、墨付けができる大工、つまり下積みを経験した若手大工の不足には、わが社だけでなく業界全体が頭を抱えています。これは在来木造住宅の将来に不安を感じさせる問題です。地方の中小建設会社はいよいよ新築住宅の工事高が上がらなくなり、営繕工事だけに頼る会社が増えるのではないかと危惧しています。辛気くさい話で申し訳ないのですが、真っ正面から取り組まなければならない問題だと考えています。

## OB受賞報告

中村弘道氏(部1期)

中村弘道・都市建築計画設計研究所

「国立国会図書館関西館(仮称)」建築設計競技佳作入選

(「新建築」9610掲載)

## インフォメーション

96年度「築理会研究セミナー」下半期の報告  
下半期2回の総参加者41名(内、学生9名)以下に主な内容。

第4回 10/11(金)吉沢 晋先生  
「室内空気環境研究の最近の傾向」

第7回室内空気環境国際会議での最新情報より、アレルギー、シックビル、微生物汚染等について、お話頂いた。

第5回 11/29(金)清水 昭之先生  
「建築におけるコンクリートの技術の現状と展望」

97年前半に改正されるJASS5の内容を中心に、劣化診断、生コンのコスト等について、お話頂いた。

なお、97年度の築理会セミナーの予定は次回の会報に掲載予定です。

97年度 総会・懇親会のお知らせ

日時:1997年3月8日(土)

場所:理窓会館

内容:16:00~17:30 講演会(予定)2階会議室  
17:30~18:00 総会 3階会議室  
18:00~20:00 懇親会 3階会議室

建築学科35周年記念にもなる総会・懇親会です。  
みなさん奮ってご参加下さるようお願いいたします。  
なお詳細は、追って通知いたします。

97年度 築理会名簿発行のお知らせ

平成9年度築理会名簿は総会・懇親会に併せて発行する予定であります。

住所、勤務先等の変更はお早めにお知らせ下さい。

### 編集後記

編集長代行を仰せつがい2度目の会報にも拘わらず、発行が2ヶ月遅れてしまった事を大変心苦しく思っています。業務の都合や当初の企画記事の頓挫などが重なり、誠に御迷惑をおかけ致しました。

先日、東京フォーラムを見学致しました。山手線からの外観には「コンペの時に比べ、随分建築的な仕上がり」に多少裏切られた印象を持っていました。ホール、ホワイエ、アトリウム等、一廻りした率直な感想は、ヴィニヨリ個人の(と言うより個人建築家が持つ特有の匂い)が余り感じられないと言う事でした。

社会状況や規模、用途からしても国内の事務所、ゼネコンと協働せざるを得なかったのでしょうか、もう少し破綻なり暴力を期待していたのですが...。(伊谷 峰)

築理会報96冬号

96年12月発行 Vol.16

編集長 : 伊谷峰

編集委員 : 森清、細井友治、伊藤学、  
安達功、平賀一浩

印刷発送 : グローバルシステム株式会社

## 名簿に載せる広告を募集します

この度築理会では、平成9年度版築理会名簿に広告を載せて頂ける方を個人、法人を問わず募集することになりました。

今後の築理会発展のためにご協力をお願いします。

なお詳しい内容等は築理会事務局までお問い合わせ下さい。

## 募集します!

年間4号の目標を掲げ、何とか今年は4号発行する事が出来ました。これもひとえに会員の皆様方のおかげです。

会報委員会では、相変わらず企画を立てるのに四苦八苦しており、引き続き築理会報に載せる記事を募集しています。「こんな特集して!」「こんな宣伝がしたい!」「最近これおもしろいよ!」など、どんな些細な情報でも首を長くしてお待ちしております。みんなで会報をいい感じにしていきたいでしょう。

築理会あてFAXにて。

## データ確認カード返送のお願い

住所、職場、部署等に変更のございます方は、下記データ確認カードにご記入の上、築理会事務局までご返送下さいませお願い致します。

最新データに基づいた名簿作成、編集のためご協力をお願い致します。

送付先:建築学科事務室内・築理会事務局

名簿作成委員会

築理会員データ確認カード		記入日: 19 / /	
ふりがな:		卒業年	年3月
名前:	(旧姓)	(期 研)	
		<input type="checkbox"/> 部	<input type="checkbox"/> 部
ふりがな/勤務先:			
ふりがな/部署・役職:	TEL		
	FAX		
電子mail:			
現住所:(〒 )	TEL	FAX	
電子mail:			
現住所以外の安定的な連絡先,具体的な連絡方法及びTEL:			
所属学会	<input type="checkbox"/> 日本建築学会	<input type="checkbox"/>	)
<input type="checkbox"/>	)	<input type="checkbox"/>	)
通信欄			

お手数ですが拡大コピーをしてFAXにてお送りください。